

# 自閉症状を示した障害児の学校適応に 関する追跡研究 II (1)

— 自閉症児の普通学級適応についての検討 —

山根律子・太田千鶴子・板垣健太郎・藤原義博  
財部盛久・池 弘 子・小林重雄

## I 目 的

本報は、前報(板垣他, 1979)において報告した小学校普通学級に通級した7名の自閉症児のその後の経過を報告するものである。

前報では、就学前にT-CLACの得点が高い群(A群)は、比較的良好な適応状況を示し、低い群(B群)は、問題行動が出現するなど就学前より後退する部分が多くなる傾向が認められた。

そこで、本報では、A群、B群のT-CLACの変化と学校および学習での適応状況、自閉症状の変容を調査し、自閉症児を普通学級へ入級させることの意味を検討する。

## II 方 法

資料は、以下のチェック・リストに基づいて得られた。T-CLAC, 自閉症状, 学校適応, 学習適応  
調査期間は、昭和53年6～7月, 昭和54年3月, 昭和54年7月で、計3回行われた。なお、T-CLACのみ昭和53年3月に調査した結果も含まれている。なお、F児は2年次より特殊学級へ移行されたため、3回めの調査結果は「自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 II (2)」で報告されている。

## III 対 象 児

対象児は、小林の基準(1978)により、自閉症と診断された児童で筑波大学知能障害研究室で指導を受け、昭和53年4月に小学校普通学級に入級したものの7名である。以下に簡単なプロフィールが示されている。

### 1. A児, 男児, 昭和46年9月生

主訴: 他児と遊べない。おちつきがない。指示に従えない。

出産: 熟産。吸引分娩。生下時体重3760g。

始歩: 11カ月半。 始語: 6カ月。

大学での指導:

(1) 昭和51年5月～昭和52年9月, 個人指導  
(1/W)

(2) 昭和52年6月～12月, ゲームを中心にした小集団指導(1/W)

(3) 昭和52年10月～昭和53年2月, 課題学習を中心にした小集団指導(1/W)

(4) 昭和53年4月～ ※ 個人指導(1/W)

※ 現在も引き続き指導が行われていることを示す。

### 2. B児, 男子, 昭和46年7月生

主訴: ことばの遅れ

出産: 陣痛微弱。早期破水。吸引分娩。生下時体重3140g(黄疸が強かった)。

始歩: 1歳頃

大学での指導:

(1) 昭和50年10月～昭和52年9月 個人指導

(2), (3) A児と同様

(4) 昭和54年4月～ 個人指導(1/W)

### 3. C児, 男児, 昭和47年2月生

主訴: 他児と遊べない

出産: 熟産。正常分娩(10カ月で流産しそうになった)。

始歩: 11カ月 始語: 1歳5カ月

大学での指導:

(1) 昭和52年5月～ 個人指導(1/W)

(2) 昭和53年1月～12月 ゲームを中心にした小集団指導(1/W)

(3) 昭和53年1月～2月 課題学習を中心にした小集団指導(1/W)

### 4. D児, 男児, 昭和45年11月生(1年就学猶予)

主訴: ことばの遅れ。落ち着きがない。

出産: 熟産。正常分娩。生下時体重2800g。

始歩: 11カ月 始語: 1歳

大学での指導：

(1) 昭和50年11月～昭和52年2月 個人指導（1/W）

(2), (3) A児と同様

(4) 昭和53年4月～ 個人指導（1/W）

5. E児，女児 昭和47年2月生

主訴：ことばの遅れ。ひとり遊びが多い。

出産：熟産。早期破水。生下時体重 3200g。

始歩：10カ月 始語：3歳6カ月

大学での指導：

(1) 昭和51年5月～昭和52年9月 個人指導（1/W）

(2), (3) A児と同様

(4) 昭和53年4月～ 個人指導（1/W）

6. F児，女児，昭和46年5月生

主訴：ことばの遅れ。落ち着きがない。

出産：逆子（妊娠中 流産予防の注射，食欲増進の投薬），生下時体重 3100g。

始歩：10カ月

大学での指導：

(1) 昭和49年2月～昭和50年3月 個人指導（Y大にて）

(2) 昭和50年4月～昭和52年3月 個人指導（1/W）

(3) A児と同様

(4) 昭和53年4月～ 個人指導（1/W）

7. G児，男児，昭和46年1月生（1年就学猶予）

主訴：人に無関心。落ち着きがない。

出産：難産。生下時体重 2900g

始歩：1歳1カ月

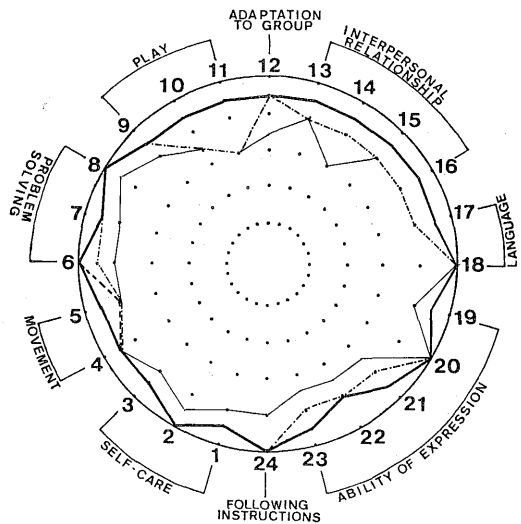
大学での指導：

昭和53年10月～ 個人指導（1/W）

途中若干の小集団指導

## T-CLAC PSYCHOGRAM

### CASE A



— S 53.3

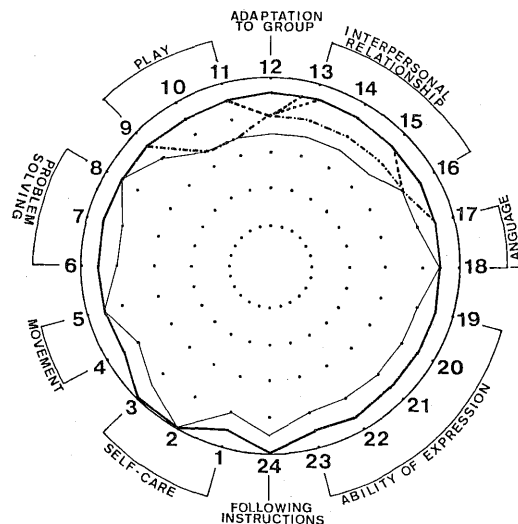
- - - S 53.7

- · - · S 54.3

— S 54.7

## T-CLAC PSYCHOGRAM

### CASE B



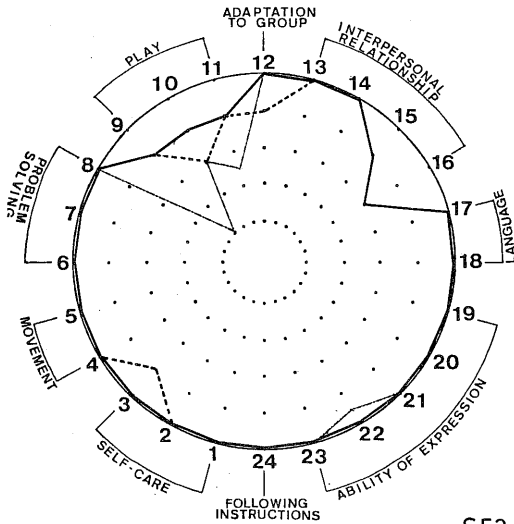
— S 53.3

- - - S 53.7

- · - · S 54.3

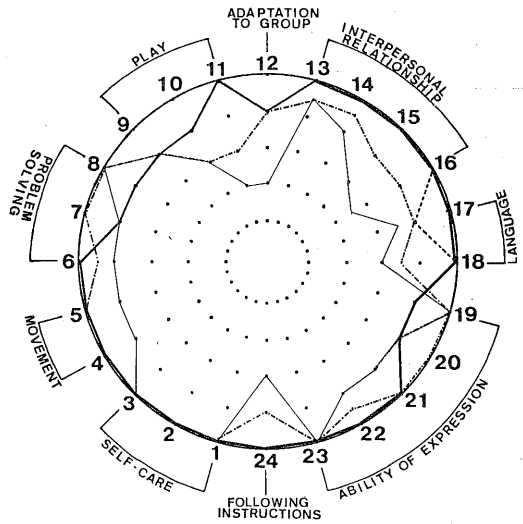
— S 54.7

**T-CLAC PSYCHOGRAM**  
CASE C



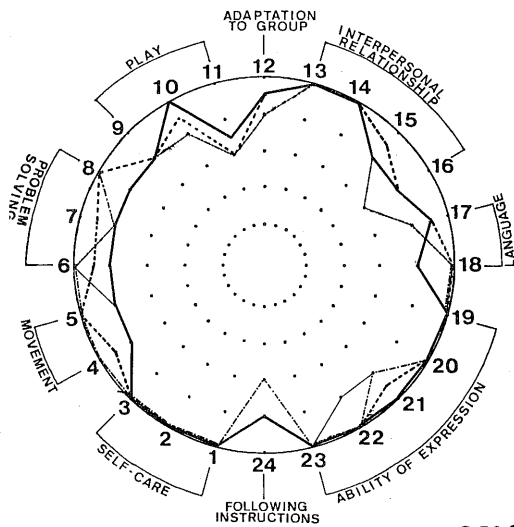
— S53.3  
- - - S53.7  
- · - S54.3  
- - - S54.7

**T-CLAC PSYCHOGRAM**  
CASE E



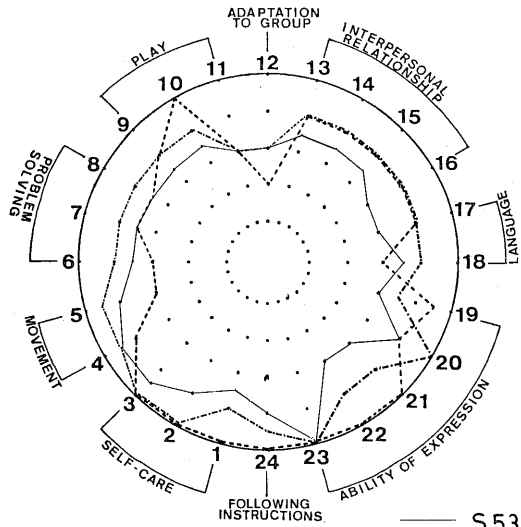
— S53.3  
- - - S53.7  
- · - S54.3  
- - - S54.7

**T-CLAC PSYCHOGRAM**  
CASE D



— S53.3  
- - - S53.7  
- · - S54.3  
- - - S54.7

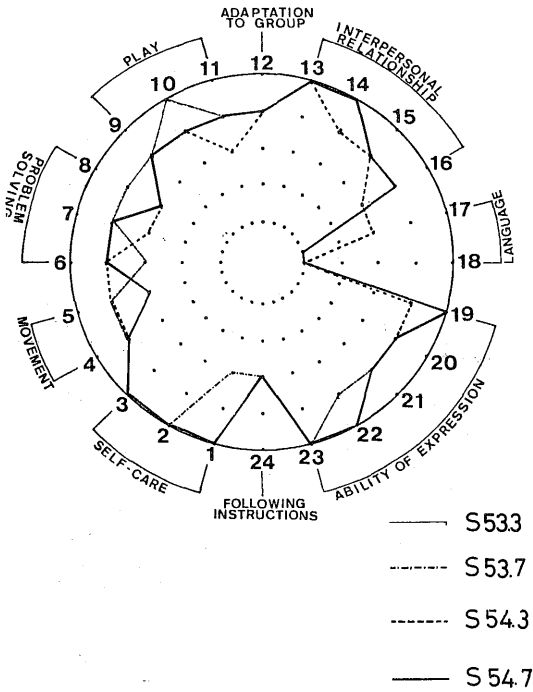
**T-CLAC PSYCHOGRAM**  
CASE F



— S53.3  
- - - S53.7  
- · - S54.3

# T-CLAC PSYCHOGRAM

## CASE G



### IV 結果

#### 1. T-CLAC における変化について

入学前、一年一学期末、一年三学期末、二年一学期末の4回をT-CLACに記入した。その結果、一年三学期末から二年一学期末にかけてでは特に項目9~11、遊びについて、と項目13~16、対人関係に変化が著しかったためこの2点について検討した(表1)。

表1 T-CLAC における変化

対象児 項目	A	B	C	D	E	F*	G
9~11	+25	+2	+55	+1.5	+3	+1	-1
13~16	+25	+2	0	+1.5	+3	0	0

\* 一年三学期末までの変化  
項目ごとに二年一学期末の得点から一年一学期末の得点を減じて、各々9~11、13~16項目を加算したものである。

すなわちここでは、A、B、C、D、E児での遊びと対人関係における改善が著しいことに比べ、F、Gでは変化の少ない事がわかる。

#### 2. 自閉症状における変化について

全般的な傾向として遊びの1-1、1-2と社会の2-1~2-4にのびの傾向がみられる一方、遊びの2-3、2-4では改善のなさ、あるいは落ちこみがみられる(表2、図1)。さらに負の傾向は家族以外のおとなや同年輩児とのかかわりにみられ、家族との関係での落ちこみはない。すなわち、遊びについては主に他から働きかけられた時の反応の改善、社会的対人関係では自分の要求を適切にあらわす面での改善が著しいことがわかる。

一方、個人別にみても(表3)A、B、Cはかなり自閉症状が改善されている部分を有するが、Dではほとんど変化がなく、E、Fでは逆に部分的には自閉的傾向が強まっていることになる。また、A、B、C、Dではほとんどがステップ3から4に集中しているがE、Fのみ逸脱する傾向がみられる。この両グループの差は遊び、社会的対人関係ともに2の自分からの働きかけに関する項目で顕著であった。

表2 項目別にみた自閉症状の変化

遊 び	1-1	1-2	1-3	1-4	2-1	2-2	2-3	2-4
正の変化	+3	+2	+1.5	+1.5	0	0	0	0
負の変化	0	0	-2	0	0	0	-4.5	-3
計	+3	+2	-1.5	+1.5	0	0	-4.5	-3
社会的 対人関係	1-1	1-2	1-3	1-4	2-1	2-2	2-3	2-4
正の変化	+0.5	+1.5	+2	+1.5	+3	+3	+2.5	+2.5
負の変化	-0.5	0	-1.5	0	0	0	-0.5	0
計	0	+1.5	+0.5	+1.5	+3	+3	+2	+2.5

項目ごとに二年一学期末の得点から一年一学期末の得点を減じて、正・負ごとに7人の得点を加算した。

表3 対象児別にみた自閉症状の変化

	A	B	C	D	F*	G
遊 び	+3	+1	+3	0	0	0
1	0	0	0	0	-1	0
遊 び	0	0	0	0	0	0
2	0	0	-2	-1	-1.5	-3
社会的 対人関係	+1.5	0	+3	0	0	+1
1	0	0	0	0	-1	-1
社会的 対人関係	+3	+3	+3	+1.5	0	+0.5
2	0	0	0	0	-0.5	0
計	+7.5	+4	+7	+0.5	-4	-3

項目ごとに二年一学期末から一年一学期末の得点を減じ、正・負ごとに各4項目づつ加算した。

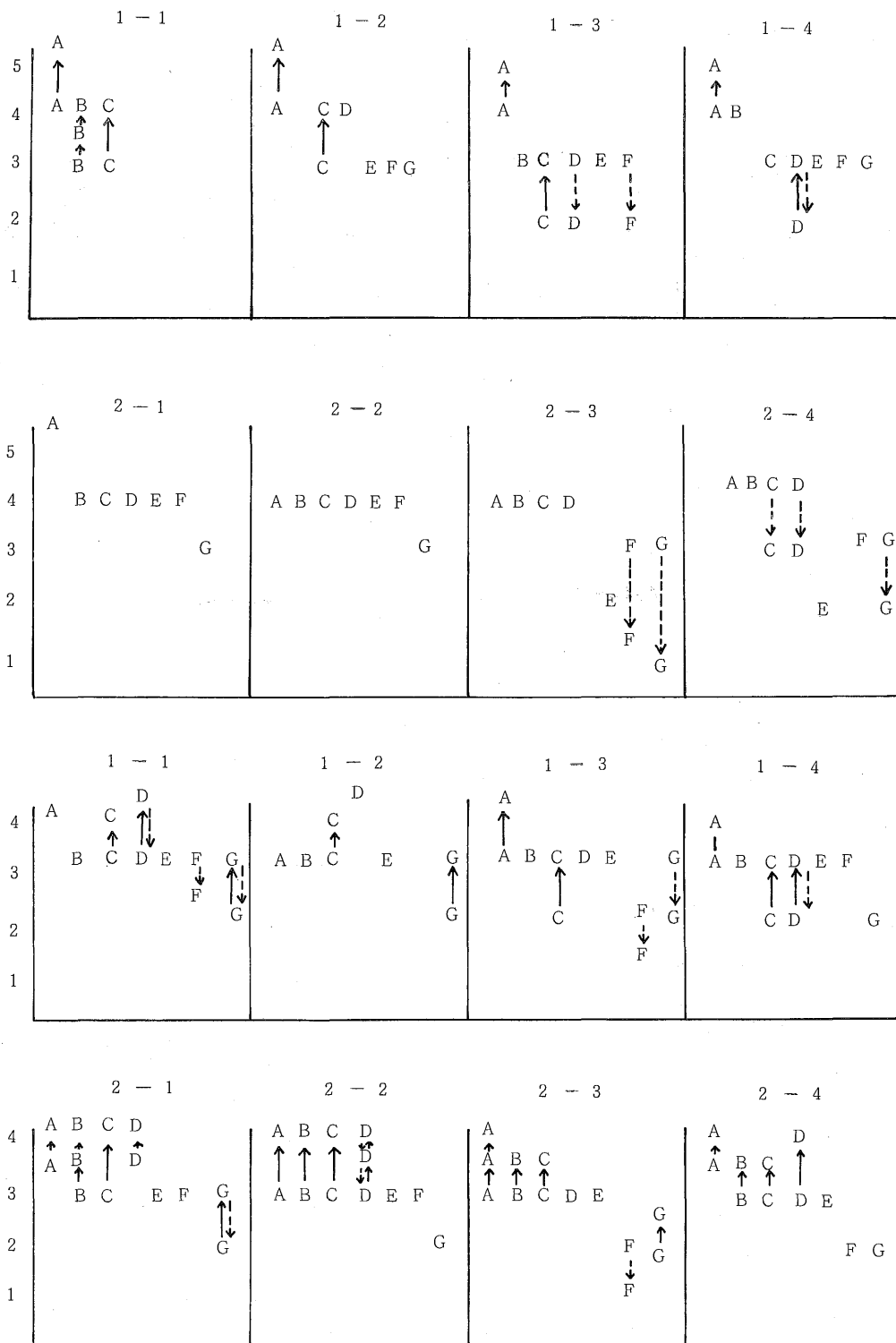


図 1 自閉症状の変化

	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		F	F ↑ G ↑			F ↓	F ↓ G ↓	F ↓ G ↓	F
2		G	G ↓	F ↓ G ↑	B ↓ G ↓ F ↓	B ↓ C ↓ F ↓ E ↓	B ↓ F ↓ G ↓	B ↓ F ↓ G ↓ E ↓	
3		B	B ↓	B ↓ G ↓	B ↓ C ↓ E ↓	E ↓	A ↓ E ↓	B ↓	
4	B ↓ E ↓ F ↓ G ↓	1 ↓ C ↓ 3 ↓ E ↓		A ↓ 1 ↓ C ↓ 3 ↓	C ↓ E ↓		B ↓ A ↓		C ↓ G ↓
5	E ↓ G ↓	A ↓ 2 ↓ C ↓ E ↓	F ↓ C ↓ E ↓	A ↓ 2 ↓ C ↓ E ↓		C ↓ A ↓	C ↓	A ↓ C ↓	C ↓ G ↓

図 2 学校適応における変化

### 3. 学校適応における変化

項目7, 8, 9では段階の低い者でも高いものでも正の方向への変化が大きい。また、項目4, 5では段階の低い者(1, 2段階)で負の方向への変化がみられ、高い者のうちでは正の方向への変化が少なかった。(表4, 図2)

表4 項目別にみた学校適応における変化

	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
正の変化	+1 (1)	+1 (1)	0 (1)	+1 (2)	+2 (3)	+5 (4)	+5 (3)	+3 (3)	+2 (2)
負の変化	0 (2)	-2 (2)	-5 (3)	-3 (1)	-1 (1)	0	0	0	0
計	+1	-1	-5	-2	+1	+5	+5	+3	+2

( )内は変化した人数  
項目ごとに二年一学期から一年一学期末の得点を減じ、正・負ごとに7人の得点を加算した。

### 4. 学習適応における変化

#### (1) 教科学習の達成度の比較

前報告で用いた一年生用の学習適応チェックリストをもとにして二年生の一学期末段階で一年生終了段階まで学習が達しているかどうかを調べた。この中で一年生終了段階の2つ前までに達している場合、一年生レベルに達しているとみなして作成されたのが表5である。この表からA, B, C, Eではかなり学習が進展しているがF, Gでは非常に遅れていることがわかる(表5)。

表5 第1学年終了の段階までの学習達成の科目別割合

対象児 科目	A	B	C	E	F	G
算数	5/5	3/5	5/5	5/5	2/4	0/4
国語	2/4	2/4	1/4	1/4	0/4	0/4
社会	2/2	2/2	2/2	2/2	1/2	0/2
理科	2/2	1/2	2/2	1/2	1/2	0/2
計	11/13	8/13	10/13	9/13	4/12	0/12

分母は各教科内で分かれている項目、分子はそのうちの第2学年一学期末までに第1学年段階に達成したものの数

#### (2) 運動面での課題による差

運動面では体操、陸上等の運動に比べ、マット、飛び箱、鉄棒のようなスキルを必要とする課題が概して低い傾向がみられた。

## V 考 察

先の報告では小学校入学時のT-CLACによりA群とB群に分けて検討を行っている。A群はT-CLACの高得点群でA, B, C, Dが属し、B群は低得点群でE, F, Gが含まれていた。本報告においても同じ枠組を用いて考察を行う。

#### 1. A 群

前回の報告においては、受動的な適応では改善がみられながら対人関係が大きく関与する項目においては、自発的に他者に働きかけることが依然困難であった。しかし、その後の経過ではさらに4児ともに自閉症状および学校適応の改善がなされ、T-CLACと自閉症状チェックリストによると自分自身から要求を表わすという面でのかなりの改善がみられていることが示されている。このことはごく部分的にはあっても能動的な適応の改善として評価されるものであろう。一方で遊びに関してはやはり能動的な面でののびはみられず、受動的な面での改善を示しているにすぎなかった。

学校場面では、基本的生活習慣(給食、排泄、登下校)がほぼ最高段階に至り、また、授業の流れの理解や集団場面での指示に従う能力がのびた。これらは主として毎日繰り返されるパタンを学習することによって改善される項目であり、生活パタンの学習は学年が進むにつれて改善される傾向がみられた。しかし、A群においても着席時の状況とか授業参加の態度ではほとんど改善はみられていない。

次に学習内容の達成度についてみると、一年生の終わりの段階をほぼ達成していると考えられる。内容的には特に国語関係の項目で達成度が低く、算数関係では高い。このことは自閉症児のもつことばの障害との関連において説明される事であるかもしれない。

#### 2. B 群

B群では前回の報告においてすでに個体差がみられていたが、今回さらに差の開く傾向がみられているため各児についての検討を行う。

#### <E 児>

一年生の一学期末のT-CLACですでにA群とほぼ類似した傾向を示していたが、その後も全般的な改善傾向を示し、現在ではA群と同様のT-CLACパタンを示している。自閉症状における改善傾向とほぼA群と同様であるが、本児の場合特に学校場面での参加に関するのびがA群の場合ほど認められない。しかし、学習内容についてみると、A群と同程度あるいはそれ以上に進展

し、達成度に関してもA群と同程度であった。学校で本児には介助員が付き、プロンプトを行っている事は先でのべたが、入学以降の本児ののびが介助員の影響によるものか、個体特性によるものかは本研究では明らかではない。

#### <F児>

先の報告ではいずれの項目においても負の方向への変化が目立ち、活動水準そのものの低下が指摘されていたが、その後も改善傾向はみられず、自閉症状はさらに若干の落ちこみを示した。学校場面においてもくり返しパタンの学習による適応に若干の改善がなされたのみで着席、授業参加には負の傾向を示した。本児は、先にものべた通り、特殊学級への移行が行われている。

#### <G児>

本児は聴覚理解の障害を有し、音声理解が困難であるため入学時から適応をあやぶまれていたケースであるがF児同様ほとんどの面でさらに負の方向への変化が認められた。改善は学校での習慣にのっとった動き、自分からの要求による働きかけ、にわずかに認められただけにすぎなかった。音声の理解が困難である障害は学習内容の達成度に顕著にあらわれ、教科ではほとんど学習でき

ないが、絵画、工作、運動面ではA群と同様の達成度を示した。

以上、A群とB群に分けて変化を中心に考察したが以下の3点が明らかになった。すなわち、(1)A群では自閉症状、学校適応ともに負の変化を示す事はなく、改善あるいは変化なしの傾向を示した。(2)入学時B群であったE児が入学後に大きな改善傾向を示し、A群と同様のパターンを示してきた。(3)他のB群では、さらに負の方向への変化を示すか変化がみられなかった。すなわち先の報告におけるA、B両群の差がさらに著しくなったと考えられよう。

すなわち本研究において自閉症児が普通学級にいることにより、全てのケースで自閉症状の改善がなされるとは限らないこと、および入学以降の適応は入学時の状態のみでは決定できないことが示唆されたと考えられる。

### 参 考 文 献

1. 板垣健太郎、他、自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 I (2)  
— 自閉症児の普通学級適応についての検討 —  
心身障害学研究 3, 101-109, 1979.



The follow-up studies concerning school adjustment of handicapped children with autistic symptoms. II(1)

— Discussion with adjustment of autistic children in regular class —

Ritsuko Yamane, Chizuko Ota, Kentaro Itagaki,  
Yoshihiro Fujiwara, Morihisa Takarabe,  
Hiroko Ike, Shigeo Kobayashi.

Using T-CLAC, autistic symptoms check list, adjustment check list, and achievement of academic learning check list, we evaluated the seven autistic children in this study from July, 1978 to July 1979, just like the former study (Itagaki et al, 1979). Then we discussed chiefly about how the seven autistic children had changed after the former study. The results and discussion of this study were following.

All the seven subjects were divided into two groups according to their scores of T-CLAC which they took when they entered elementary schools.

Four subjects, who had gained high scores of T-CLAC (A group), showed the remarkable improvement in "playing" and "interpersonal relationship", especially in the passive reaction against other people's action in the case of "playing", and the active reaction based on their needs to other people in the case of "interpersonal relationship". This tendency of A group was quite clear in T-CLAC and autistic symptoms check list, but not very clear in school adjustment check list. Moreover, in achievement of academic learning check list, A group have reached the level of the third grade in the first year grade by the time they finished the first grade in the second year grade.

On the other hand, three subjects, who had gained low scores

of T-CLAC (B groups), showed two different patterns of their changes. Although one of them showed the similar pattern to A group, the other two subjects showed no improvement or downward tendency of autistic symptoms. The two subjects also showed the delay of the academic learning achievement.

According to the above results, it was concluded that,

(1) A group showed the improvement or no change in both the autistic symptoms and the school adjustment.

(2) One subject in B group showed the similar tendency to A group.

(3) The other two subjects showed the negative change or no change.